

初等科國語

一

文部省

第三學年前期用

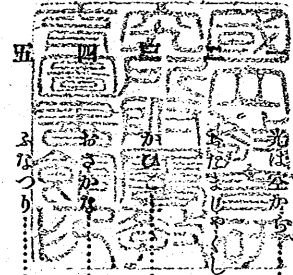


D5

297



以下開き不良



八 電車
七 田 植
六 川をくだる
五 ぶなつり
四 ぶなつり
三 ぶなつり
二 ぶなつり
一 ぶなつり

は空から 若葉から、
明かるい、明かるい 若葉から。
天長節は うれしいな。

花から花へ てふがまひ、
花から花へ はちがとぶ。
天長節は うれしいな。

小鳥のおんがく、ほうほけきよ、
ちいさい、びびい、ほうほけきよ。
天長節は うれしいな。

川が流れる、野がつづ、
ふもとの町は 旗のなみ。

九 子ども八百屋 十
十 夏の午後 十一
十一 夏やすみ 十二

一一 おたまじやくし

おたまじやくしは、毎日、大勢の兄弟や仲間といっ
しよに、池の中を泳いでゐました。まるで まりの行
列のやうに、あとからあとからぞろぞろとつづいて行
きました。どれも、これも、まるい頭をふり、長い尾
をふつて、元氣よく泳いでゐました。

おたまじやくしは、手も足もなく泳げるのですか
ら、自分たちの親が、あの四本足の蛙だらうとは思
つてゐませんでした。それよりも、ときどき池の中で
見かける鯉やふなが、親ではないかと思つたことがあ
りました。また、小さなめだかを見ると、これも、自
分たちの仲間ではないかと、思つたこともありました。
しかし、おたまじやくしには、たくさんの兄弟があ
るのですから、親のそばにゐなくても、ちつともさび

もくろふ

しくはありませんでした。また、めだかや、どちやうなどといつしよに、遊ばなくてもよいのです。春の日は、だんだん過ぎて行きました。水草が青々とひび、水の上には、ときどきとんぼがとんで来て、かげをうつすことがありました。

このころになると、おたまじやくしは、尾のつけ根のところが、少しふくれて来ました。初めは、それと気がつかないほどでしたが、のちには、だんだんふくれ出して、とうとう、それが二本のかはいらしい足になりました。

おたまじやくしは、何だかおそろしいやうな、うれしいやうな氣がして、わいわいさわいでゐました。さうして、ときどき、水の上へ、顔を出してみたりしました。

それから、また何日かたちました。今度は、胸の雨といひました。私は、かひこがはしくてたまらないので、もらつて來ましたが、さういふはれてみると、うちには、桑の木がないことに氣がつかしました。

二十四のかひこは、桑の葉をほしさうにして、動いてゐます。私は、竹田さんのところへ走つて行きました。あそここの畠に、桑の木があることを思ひ出したからです。

さつそく、桑の葉をもらつて来て、箱の中へ入れてやりますと、ねえさんは、

「葉が大きくて、たべにくいから、きざんでやりませう。」

といひました、小刀で、葉を切つてやりました。かひこは上手にたべました。

ある朝、大雨が降りました。風も吹いてゐましたが私は、いつものやうに、桑をもらつてかへつて來まし

短くなつて行きました。さうして、水の中にあるのが、いやになつて來ました。水の中にあると、何だか息がつまるやうな氣がしました。水の上へ顔を出すと、氣がせいせいするやうに思ひました。

ある日、岸の草につかまつて、池の外へ出てみました。もう夏の初めでした。草が、青々と茂つてゐました。空には、お日様が、ざらざら光つてゐました。

あと足を曲げて、前足をついてすはわつたかつかうは、これまでのおたまじやくしではありませんでした。かうして、陸へあがつたたくさんの子蛙は、草のかげのあちらこちらを、うれしさうにとびまはりました。

三 かひこ

をばさんのうちから、二眠をすましたかひこを、二と、ねえさんにいはれたので、私は、桑の葉を一枚一枚ていねいにふいて、かわかしてから、かひこにやりました。

二日はどたつと、かひこは眠りだしました。私たちなら、横になつてゐるのに、かひこは、頭をちやんとあげて眠ります。それも、一日中、そのまま眠りとはすので、首がつかれないだらうかと思ひました。

私は、早くまゆを作るところが見たいので、ねえさんに、

「いつごろまゆを作るでせう。」

と聞くと、

「今、三眠ですから、もうあと一度眠つたら、まゆを作りますよ。」

といひました。

むしあつた日がつづいて、かが出るやうになりまし

た。ある夜、私が本を讀んでゐると、あまりかが多いので、かとり線香をつけました。

そのあくる日の朝、箱をのぞいて見ると、どうしたことであんなに元氣のよかつたかひこが、みんな弱つてゐるではありませんか。

私はおどろいて、ねえさん呼びました。

「ゆうべ、桑をやるのを忘れませんでしたか。」

「いいえ、新しいのをたくさんやつておきました。」

「どうしたのでせうね。」

ねえさんも考へてゐましたが、

「このへやで、かとり線香をつけませんでしたか。」

となづねられて、私は、はつとしました。

「ええ、ゆうべ、つけました。」

「あ、それですよ。かひこは、あれが大事らひですからね。」

「なやうをしました。」

かひこは、糸をはき出しました。目に見えないやうな細い糸を、さかんに口から出して、自分のからだのまはりを包んで行きました。

「あんな青い桑の葉をたべて、よく、こんな白い糸が出て来るものですね。」

と、ふしぎに思つていひますと、ねえさんも、

「ほんたうにね。」

といひました。

初めは、うすい、うすい紙のやうなまゆでしたが、それが、だんだんあつみをもつて来て、かひこは、まゆの中に、かくれて見えなくなりました。

ある日、竹田さんが遊びに來ました。私が、かひこの箱を見せると、

「あら、きれいなまゆができましたね。」

私は、あわてて窓をあけました。桑をもらひに行く途中も、心の中で、「どうぞ元氣になりますやうに。」といのりしました。

つみたての桑の葉をやると、かひこは、どうやらからだをのばすやうにして、そろそろたべ始めましたので、私ははつとしました。

けれども、どうしても桑をたべようとしないうが、五匹ゐました。そのうち、だんだんやせて行つて、三日めには、五匹とも死んでしまひました。

四度めの眠りをすましたかひこは、二日三日するとからだもずつと大きくなつて、桑の葉を、おかしやうに、たくさんたべました。

そのうちに、青白かつたからだだが、だんだんすきはつて見えるやうになりました。ねえさんは、

「さあ、もうちき、まゆを作りますよ。」

四 おさかな

皿のおさかな、

どこから來たの。

皿のおさかな、

海から來たの。

海はひろびろ

なみの底、

たひやかつてが

あたでせう。

こんぶの林が

あるでせう。

わかめの野原が

あるでせう。

皿のおさかな、

もう一度、

泳ぐところが

見たいなあ。

五 ふなつり

「このへんが、つれさうだね。」

と、にさんが、小川をのぞきこんでいひました。

水草が、たくさん生えてゐました。きつと、魚がかくれてゐるにちがひありません。私たちは、急いでつりのしたくをしました。

にさんが、ひゆつと、つり竿をふると、つり糸が、

と、にさんがいひました。

にさんと二人で、氣をつけながら引きあげると、

大きなふなが、水ぎはでびちびちはねて、うろこがきらきらと光りました。

六 川をくだる

私は、一度、川にそつて川口まで行つてみたいと思つてゐました。

あとうさんが、許してくださいだったので、きのふの日曜日に、にさんと二人で出かけました。

朝つゆにしまつた小道を通つて行くと、川の岸へ出ました。

流れが急で、白い波が、石と石との間にわき返つてゐました。

岸は、青葉であははれてゐますが、ところどころに、

ろがりました。にさんと並んで、私もつり始めました。

二人は、じつと、うきを見つめました。

あたりは静かで、ときどき、川かみの板橋の上を通る荷車のひびきだけが、聞えて來ます。

びく、びく、びく——にさんのうきが動きました。にさんは、あわてて引きあげました。

「なんだ、ゑさを取られたのか。」

と、つまらなさうに笑ひました。

空の雲が水にうつつて、うきのそばを、ゆつくり流れて行きます。

ぐぐ、ぐぐつと、今度は私のうきが、水の中へ引きこまれました。強い手ごたへが、つり竿をつたはつて來ました。はつと思つて引きあげようとすると、重くてなかなかあがりません。つり糸がびんとはつて、つ

よに、唱歌を歌ひました。すると、川の音も、同じ唱歌を歌つてゐるやうに聞えました。

茂つた竹やぶがあつて、しばらく川が見えなくなりましたが、「ド、ド、ド、ド」といふ水の音が聞えて來ました。川が、たきになつて落ちてゐるのじした。

ときどき、流れがゆるやかになつて、青々と水をたたへてゐました。川原の石の上を、せきれいがとんでゐました。

しばらく行くと、向かふの岸から、小川が流れこんで來ました。こちらの岸からも、小川がそぞこんでゐます。ちやうど親の手に、子どもがすがりつくやうでした。

まもなく、川の近くにある停車場に着きました。汽車が來たので、それに乗りました。汽車が走り出すと、すぐトンネルにはいりました。出ると、高いところを走つてゐるので、川は、ずつと下の方に見えました。

だんだん兩岸が開けて來て、川はばが廣くなりまし
た。ところどころに中洲があつて、小さな木が生えて
ゐました。川はあだやかになつて、音もなく流れてゐ
ます。

汽車が鐵橋を渡ると、今まで左手を流れてゐた川が、
右手を流れて、日の光をあびて、まぶしいほど光りま
した。

村のふみきりを通る時、子どもが立ちをを見て、ば
んざいをしてゐました。

渡し場がありました。船頭さんが、舟をこいでゐま
した。舟には、子牛も乗つてゐました。

汽車が止つたので、私たちは降りました。

今度は、そこから馬車に乗つて、川口の町まで行く
ことにしました。

「ポポー。」と、ラッパを鳴らしながら、川岸の道を走
つて行きました。そのへんは麥畠で、麥のほが出そろ

思ふと、急に高いところからとびおりたりします。

小さな川と、伸よく手をつないで、川は、いつのま
にか大きくなります。

きらきらと光つて笑つたり、青くすんで、じつと考
へこんだりします。

川にも、いろいろな心持があるやうに思ひました。

七 田 植

そろた、田そろた、

さなへが、そろた。

植ゑよう、植ゑましよ、

み國のために。

米はたからだ、たからの草を、

植ゑりや、こがねの花が咲く。

川の向かふ側に、工場があつて、高いえんとつから
茶色な煙が出てゐました。川の水は、すんではゐませ
んが、青い空をうつしながら、ゆつくりと流れて行き
ます。

町の入口で、私たちは馬車をおりました。あみを干
してあるのが、あちこちに見えました。車にかつをを
たくさんつんで、おせいよく引いて行くのに出あひま
した。

町を通りぬけて、川口に近い岸に立つと、海が見え
ました。舟が、何ごうもつながらゐました。川の水
は、ここで海へ流れこんでゐます。

頭のすぐ上を、かもめが、五六羽とんで行きました。
いその香をふくんだ風が、そよそよと吹いてゐました。
その夜、私は、次のやうなことを書いて、おとうさ
んにお目にかけました。

川は、初め走つて流れてゐました。

植ゑ手も、そろた。

植ゑよう、植ゑましよ、

み國のために。

ことしやほう年、穂に穂が咲いて、

みちの小草も、米がなる。

八 電 車

にいさんと、電車に乗りました。

人がいっぱい乗つてゐて、あいてゐる席は、一つも
ありませんでした。私が、にいさんと並んで立つてゐ
ますと、すぐ前に掛けてゐたよそのをちさんが、私の
顔を見ながら、

「ぼつちゃん、ここへお掛けなさい。」

といつて、立つてくれました。私は、

「いいんです。ぼく、立つてゐますから。」

といひましたが、をぢさんは、

「いや、わたしは、もうちきおりますから、かまはずに、お掛けなさい。」

といひながら、あつちへ行きかけました。

「どうも、ありがたう。」

と、にいきさんがいひました。

「ありがたう。」

と、私もいひました。

せつかく、あけてくださったのだ。おまへ、お掛け。

と、にいきさんがいひましたから、私は掛けました。

次の停留場へ来た時、をぢさんは、そこでおりのかと思つたら、おりませんでした。

それから、二つ三つ停留場を過ぎて、表町まで来ますと、人がたくさんおりて、席があきました。をぢさん

も、ここでおりました。にいきさんは、私のそばへ掛けました。

子どもの買出し。

押せ押せ、車を、

よいしよ、よいしよ。

おとうさんは病氣、

おかあさんと四人で、

八百屋だ、毎日。

押せ押せ、車を、

よいしよ、よいしよ。

くに子も、ひさ子も、

あと押し頼むぞ。

にいきさん、しつかり。

押せ押せ、車を、

よいしよ、よいしよ。

つて来ました。席はみんなふさがつた上に、立つてゐる人も、たくさんありました。

いちばんあとからはいつて来たのは、七十ぐらゐのおばあさんと、赤ちゃんをおぶつたをばさんとしたすると、にいきさんが、小さな聲で、

「立たう。」

といひました。

おばあさんとをばさんが、ちやうど私たちの前へ来た時、私たちは、すぐ立つて、席をゆづりました。二人は喜んで、

「どうも、ありがたうございます。」

といひながら、ていねいにおじぎをして、掛けました。

電車は、また動きだしました。

九 子ども八百屋

かばちやも、トマトも、

にこにこしています。

押せ押せ、車を、

よいしよ、よいしよ。

おかあさんが待つてる。

お客も待つてる。

急いで、かへらう。

押せ押せ、車を、

よいしよ、よいしよ。

十 夏の午後

「ジョッ。」と、せみが鳴きました。

はくは、はだして庭へ出た。せみは、桐の木で鳴いてゐる。そつと行つて見ると、一メートル半ぐらゐの

高きところに、あぶらせみが一匹止つてゐる。せいのびして、手をのばしてみたが、だめだ。ぼくの手先より二十センチも高い。取れないと思ふと、くやしくなつて、木の幹をとんとたたく。せみは、びつくりしたやうに、「ジジ。」と聲をたてて、とんで行つた。

井戸ばたへ行つて、足を洗つた。ざあつと、つめたい水をかけると、いい氣持だ。げたをはいて、うらの島へ行つてみる。

なすも、きうりも、みんな暑さうにぐつたりしてゐる。きうりにそへて立ててゐる竹に、とんぼが止つたり、はなれたりしてゐる。

島のすみの日まはりには、暑い日をいつばい受けて、金のお皿のやうなのが、三つ咲いてゐる。今では、ぼくよりもずつとせいが高いが、これもぼくが植ゑたのだと思ふと、何だかかはいいい氣がする。

暑い、暑い。うちへかへつて、えんがはに腰を掛け

まき場のこまが朝風に、

いななきながら呼んでゐる。

あすからうれしい夏やすみ、

大波小波うち寄せて、

海がわたしを待つてゐる。

な聲が聞えて来る。さうだ、ぼくも行つてみよう。

「おかあさん、川へ行つてもようございますか。」と大きな聲で聞いてみると、

「あぶないから、よく氣をおつけなさい。」

と、あちちでおかあさんの聲がした。

ぼくは、帽子をかぶつて、いちもくさんに走つて行つた。

十一 夏やすみ

あすからうれしい夏やすみ、

まぶしく晴れた大空に、

ま白な雪が浮いてゐる。

あすからうれしい夏やすみ、

山べに野べに白ゆりが、

十二日記

七月十六日 月曜日 晴

朝起きると、おとうさんは、もう庭の朝顔のせわをしてゐられた。

「ほうら、こんな大きな、赤い花が二つ咲いた。」
と、にこにこ顔。

學校では、三時間めに、三年生以上の合同體操があった。暑い夏の日が、かんかんてりつける中で、行進をしたり、かけ足をしたり、體操をしたりした。

七月十七日 火曜日 晴

けさは、朝顔が三つ咲いてゐた。水色が二つに、赤が一つ。

學校では、四時間めに、共同作業をした。ぼくたちは、校舎のうらの草をむした。先週の金曜日に抜い

昭和二十一年三月七日 翻刻印刷
昭和二十一年三月二十五日 翻刻發行
昭和二十一年三月七日（文部省検査済）

初等科國語一 第三学年用第一分冊

◎ 定價 金 五拾錢

著作權所有 發行權 文 部 省

東京都小石川區久堅町一〇八番地

翻刻發行 日本書籍株式會社

兼印刷者

代表者 大 橋 光 吉

東京都小石川區久堅町一〇八番地

印刷所 日本書籍株式會社

Approved by Ministry
of Education
(Date Mar. 7, 1946.)

發行所 東京都小石川區久堅町一〇八番地
日本書籍株式會社

に抜いた。としさんが「さっ。」といったので、見る
と大きなみみずがある。先生が、

「みみずぐらゐに、どうしてそんな聲をたてるので
す。」

とお笑ひになった。

七月十八日 水曜日 くもり

くもってゐたせゐか、朝からむし暑かった。朝顔は、
二つ咲いてゐた。赤一つ、白一つ。

三時間めの合同體操の時は、汗でべとべとした。夏
は、かんかんとてつた方が、氣持がいいと思つた。

夕はんがすんでから、おかあさんと、ねえさんと、
ぼくと三人で、えん日へ行つて、すす虫を買つてかへ

つた。ねる時には、涼しさうな聲で鳴いてゐた。

七月十九日 木曜日 晴

朝起きると、すす虫を見た。元氣なので、安心
した。きうりを少しやった。